

2009年3月25日

熊本県知事
蒲島郁夫 様

京都大学名誉教授
今本博健

路木ダムについての意見書

熊本県は、天草下島の羊角湾に注ぐ流域面積がわずか10.3km²という路木川に、高さ53m、総貯水容量229万m³、集水面積6.8km²、総工費約90億円、という重力式コンクリートダムをつくる計画を進めています。このダムの主な目的は、洪水による被害を防ぎ、水道用水を取水するためとされていますが、これに対して、たとえば洪水が氾濫しても被害は少なく、また水道用水もダムなしで賄えるとして、「路木ダムを考える河浦住民の会」などの市民グループがこの計画に反対しています。

わが国では、治水および利水あるいは発電を目的として、すでに約2700基という多くのダムがつくられてきました。しかし、ダムは、治水面での効果が限定的なうえ、地域社会あるいは自然環境を破壊することから、国交省も新たなダムは計画しないという方針を打ち出しています。あれほど全盛を誇ったダム時代も終焉を迎えようとしているのです。

ところが、高度経済成長期につくられたダム計画が、人口が減少しかつ地方の財政が悪化するという社会情勢の変化によって当初の目的が失われたにもかかわらず、強行される事例が目立っています。なかには、計画そのものの意義すら認められないものまであります。

私は、河川工学者として、市民グループの案内により2009年3月16日および3月25日の2回にわたり路木川およびその周辺を見学いたしますとともに、数名の地元住民の皆さんの意見を聞きました。また、入手しうる範囲で資料を収集いたしました。貴県は、路木ダム計画が大事業であるにもかかわらず、ホームページなどを通じて積極的に資料を公開することをしていませんが、得られた資料ならびに現地見学の結果をもとに、路木ダムについての意見を述べさせていただきます。

貴県が策定されました「路木川河川整備計画」(2001年1月)によりますと、「1982

年7月等の豪雨による洪水時に下流宅地において約100棟の床上浸水が発生した」とありますが、この被害は河浦町全体のものであり、路木川流域では被害は発生していないことが市民団体の調査によって明らかにされました。

過去の被害は厳然たる事実であり、データの捏造あるいは報告されたデータを鵜呑みにする怠慢は行政として許されるものではありません。ダム事業には県費だけでなく国費も補助として費やされることを考えますと、こうした行為は県民だけでなく国民への背任行為であります。整備計画の策定者である貴県の責任はきわめて重く、基本方針あるいは整備計画を審議した委員会の責任も問われねばならないと考えます。

その後、貴県は路木ダムの必要根拠を、計画規模1/30(概ね30年に1回程度発生する降雨による洪水)に対処するためと変更していますが、これにも疑義があります。

多くの浸水家屋が発生するとしている路木橋上流右岸の想定破堤地点は、地形上から見て山付堤防であるうえ、左岸堤防に比べて約60cmも高く、そこでの破堤の可能性はまったくないといえます。路木橋下流右岸に住まわれる方も先々代からの100年以上にわたって洪水が氾濫したことがないと証言されています。

もし、破堤の可能性のない地点を破堤地点と想定していることが、破堤による被害を過大に見せようとするためであれば、それは欺瞞以外のなにものでもありません。どうしてもダム計画を推進されるというのであれば、現実に基づいて計画を根底から科学的に見直す必要があります。

これまでに発表されたダム計画に関わる各種の数値が整合していません。

例えば、貴県が策定された二級河川路木川河川整備基本方針(2000年7月)あるいは路木川河川整備計画(2001年1月)によりますと、「概ね30年に1回発生する規模の洪水に対処するため、基準地点大河内橋(河口からの距離1.4km)において基本高水のピーク流量140m³/sのうち80m³/sを調節して、河道への配分流量を60m³/sとする」とされるのみで、路木ダムにおける計画高水流量あるいは洪水調節量は示されていません。

このため、同じく熊本県が策定した路木川総合開発事業計画書(1993年3月)を参照することにしますと、そこに示された計画規模は1/50であり、基準地点も河口とされており、先の基本方針あるいは整備計画と異なっています。なぜ、基準地点や計画規模を変更されたのでしょうか。

とくに問題なのは、開発事業計画書では「ダム地点では計画高水流量130m³/sのうち40m³/sを調節し、90m³/s(最大95m³/s)を放流する」とされていますが、貴県が作成したパンフレット「路木川水系・路木川河川総合開発事業・路木ダム」(2004年11月)では「ダム地点の計画高水流量130m³/sのうち94m³/sを洪水調節し、36m³/sを放流する」とされています。

開発事業計画書およびパンフレットのいずれにも共通する路木ダムの130m³/sとい

う計画高水流量に相当する計画規模を 1/50 とするならば、基本方針および整備計画が目標とする 1/30 という計画規模での路木ダムの計画高水流量はいくらなのでしょううか。

また、開発事業計画書では 130m³/s のうち 40m³/s を調節するとしているのに対して、パンフレットでは同じく 130m³/s のうち 94m³/s を調節するとしています。両者には 2 倍以上の差がありますが、いずれが正しいのでしょうか。

このような基本的数値が基本方針あるいは整備計画に記載されていませんが、その理由は为什么呢うか。

このように、路木ダム計画は虚偽と欺瞞に満ちており、内容もきわめて杜撰です。路木川の実際の氾濫域の多くは農地であり、人家はほとんどありません。さらに農地では下流側から洪水が氾濫するような工夫もなされており、洪水と共生する古くからの知恵が活かされています。したがって、治水面に関しては、路木ダムを整備計画に位置づけるのはきわめて不適切です。

利水面からみても、2008 年 10 月 15 日に天草の海を考える会代表の植村振作氏が熊本県公共事業再評価監視委員会に提出されました「路木川水系路木川総合開発事業路木ダム建設に関する意見書(2)」で指摘されていますように、貴県の牛深・河浦地区の水需要予測は過大であると判断されます。現在の水道施設の維持管理も不十分で、漏水が目立ちます。たとえ路木ダムを建設しなくても、水道用水を確保することはでき、未給水地区への給水も可能です。

このように、治水面からも利水面からも不要なダムをつくれば、治水および利水の効果がほとんどないだけでなく、貴県の財政が圧迫されることになります。水道代の値上げによって住民も迷惑します。天草市の財政も破綻します。

さらに懸念されるのが羊角湾への影響です。アマモ場の大群落に恵まれる羊角湾に悪影響が及ぶのは他のダムの例からも明らかです。

貴県の宝は球磨川・川辺川だけではなくあります。路木川も貴重な宝です。川辺川ダムの白紙撤回を求められた知事の勇断を路木川ダムの中止にも発揮されますことを望んでやみません。

以上